

平成 30 年 6 月 22 日現在

機関番号：10102

研究種目：基盤研究(B) (海外学術調査)

研究期間：2014～2017

課題番号：26301027

研究課題名(和文)ドイツにおける障害児者の余暇とアダプテッド・スポーツ：移行支援を中心に

研究課題名(英文)Leisure and Adapted Sports for Person with Disabilities in Germany: Focusing on Transition Support

研究代表者

安井 友康 (Yasui, Tomoyasu)

北海道教育大学・教育学部・教授

研究者番号：00260399

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 7,100,000円

研究成果の概要(和文)：ドイツでは、これまで通常教育と特別支援教育の分離教育を採用していたが、2009年に国連条約を批准した後、インクルーシブ教育を取り入れた新たな取り組みが行われている。本研究の目的は、ドイツのインクルーシブ教育への移行が障害者の地域生活にどのような影響を与えるかを明らかにすることであった。対象はドイツのベルリン市州及びニーダーザクセン州における障害者のためのスポーツ・余暇クラブ、学校、社会福祉施設であった。活動の映像記録及びインタビューの内容が分析された。その結果、それぞれの地域で、地域移行に向けた学校と余暇・スポーツクラブの協力関係、スポーツ授業と地域スポーツクラブとの連携などが見られた。

研究成果の概要(英文)：Germany has adopted an educational system that segregates regular and special needs education, but has undertaken new efforts when it ratified the UN Convention in 2009. Most previous international comparisons have examined mainly the respective national systems. The purpose of this research was to clarify what kind of influence the transition to inclusive education in Germany on the local life of people with disabilities. The subjects were sports and leisure club for persons with disability, schools, social welfare institutional home in Berlin and Niedersachsen, Germany. The visits were recorded with a video recorder, and video and interview contents were analyzed. As result, in the Berlin and Niedersachsen, cooperative relationships with local schools and others were seen. Efforts toward more inclusive education and formation of an inclusive community at the school were also pointed out, and relationships between sports classes and local sports clubs were seen.

研究分野：アダプテッド身体活動

キーワード：障害児 障害者 ドイツ 教育 余暇 スポーツ アダプテッドスポーツ

1. 研究開始当初の背景

国連の障害者の権利条約(2006)や、障害者基本法の改正(2011)などの制度改革に見られるように、障害児者の地域生活を支える社会システムの構築が課題となっている。地域生活を支えるシステムの構築は、これまで生活支援や就労支援を中心に進められ、余暇やスポーツ活動への参加は、それらの補足的なものとしてとらえられる傾向があった。ところが障害者にとっての余暇やスポーツ活動は、単に生活の潤いや気分転換などの自立に対して補助的な関係にあるのではなく、就労を継続させる上でも大きな要因となることが指摘されるようになってきている(安部2005)。

日本においてもスポーツ基本法の改正(2011)に見られる通り、障害者の地域スポーツへの参加を保障するための制度が作られつつあり、さらに東京オリンピック・パラリンピックの招致をきっかけに、障害者のスポーツ参加に対する環境整備が期待されている。一方、障害者のスポーツ参加を進めるにあたっては、障害の特性に合わせた種目やルール、道具の工夫など(アダプテッド・スポーツ)が求められる。学校と地域社会における、これらの具体的な支援方法に関する情報や、余暇やスポーツへの参加が就労継続を含めた障害者の自立生活に与える影響についての研究や実践情報の蓄積が求められる。

ドイツは、国の規模や教育、福祉システムなど日本と多くの共通性があり、日本の総合型地域スポーツクラブのモデルともなっている。これまで統合教育に関する取り組み(窪島1998)や障害者の地域スポーツ(Heinemann:川西ら訳1999、安井ら2012)などについて報告されてきたが、2009年の障害者の権利条約批准の影響もあり、地域スポーツクラブや余暇支援のシステムをベースとした注目すべき新たな支援が展開されつつあった。しかし、ドイツにおける障害児者の余暇・スポーツを含めた地域支援に関する研究や情報はきわめて少ない状況であった。

2. 研究の目的

本研究は、インクルージョンへの取り組みが比較的早くから進むドイツの大都市(ベルリン市州)とシステムの転換が行われつつある地方・小規模地域(ニーダーザクセン州)の、余暇・スポーツ支援活動および学校を対象に、余暇やスポーツ支援がどのように展開し、就労移行・就労継続に向けてどのような役割を果たしているのか、実際の活動やスポーツ授業の調査とともに関係機関へのインタビューなどを通して調査を行った。またその際、制度の転換は、どのような変化と課題をもたらすのか、またこれまでドイツで発展してきた心理・運動(Psychomotorik)など

がどのような影響を与えているのか、などの視点からこれまで記録してきた教師・関係者へのインタビューと映像による授業記録などを通して分析を行う。

3. 研究の方法

本研究では、ドイツにおける特徴的な地域として、インクルージョンへのシステム転換が比較的進んだ大都市のベルリン市州とシステムの転換が図られようとしている小規模・農村地域のニーダーザクセン州をフィールドとした。それぞれの地域の就労移行に向けた取り組みについて、課題となっている中等教育機関と就労支援・就労継続を支える福祉機関、地域の余暇・スポーツ支援機関の調査を行なった。

特に障害者の権利条約の批准が障害児者の地域生活(教育・福祉現場を含む)にどのような変化をもたらすのかと言う点に着目し、余暇・スポーツ支援の視点からインタビュー、映像記録の分析などを通して縦断的に調査した。またスポーツ授業について、映像記録をもとに指導者との相互作用、指導者と対象児者との相互作用、対象者同士の相互作用などの観点から分析を行なった。

4. 研究成果

(1)大都市(ベルリン市州)におけるインクルーシブ教育への移行

ドイツ・ベルリン市州では、通常学校で学ぶ「特別な教育的ニーズをもつ児童生徒」の割合が、特別支援学校より高くなり、多様な教育的取り組みが求められるようになってきていた。特別支援学校(盲学校)と通常学校の視覚障害児の体育(スポーツ授業)の様子とともに、地域のスポーツクラブ(乗馬クラブ)などの地域資源を活用した多様な取り組みを紹介した。さらに盲学校から地域の学校への巡回相談・授業などを行っている教師(盲学校コーディネーター)へのインタビューを通して、インクルーシブ教育の現状と進展に伴う課題についても検討した。本人と家族の希望や障害特有のニーズに合わせた盲学校と通常学校の柔軟な連携体制や、スポーツクラブや視覚障害の支援施設を活用した学校から地域移行に向けた連続的で柔軟な支援体制が構築されつつある様子が示された。また授業の取り組みとして、心理・運動法をして発展してきた支援方法が、授業に組み込まれ、インクルーシブな取り組みを支える内容として取り込まれている様子も見られた。

一方、重度の視覚障害児も通常学校で学ぶようになる中で、児童によってはストレスを強く感じて、盲学校に在籍を変更するケースなども見受けられた。支援にあたるコーディネーターのインタビューからは、支援方法や学校選択などにおける模索が続いている様子もうかがわれた。

またインクルーシブ教育の取り組みを続けてきた障害のある子どもが進学することが多い上級学校（ゾフィーショル学校）などの調査では、障害のある子どもたちを含めたインクルーシブな授業が行われる一方、障害の状況に合わせて、障害のある子どもたちを集めた授業なども実施されており、柔軟な教育的対応が図られている様子が見られた。

(2)大都市のスポーツクラブ

地域スポーツの普及が進むドイツでは、障害のある人についても、スポーツクラブに登録するなど多種多様なスポーツ活動を行っている。その背景には、国民のスポーツに親しむ文化をベースに、学校教育や地域におけるスポーツ体験の場の拡大、リハビリテーションスポーツ、障害にともなう二次障害の予防、健康の維持増進を図るスポーツの体験の場の確保、支援者の養成などの取り組みが行われてきたことがあげられる。さらにトップアスリートを支える経済的、環境的支援環境の形成も進められている。メディア戦略とともに所属チームなどの地域クラブとしての活動、インクルーシブなスポーツへの移行を通し、障害者のスポーツが多く国民にとって、身近に感じられるようになる取り組みが進められている。このようなすそ野の広がり、より多くの国民の障害者スポーツへの関心を高めることにつながり、さらに障害者の競技スポーツを支えるという構造を生み出している。

ベルリン市では、多くのスポーツクラブがインクルーシブな組織に移行しているが、障害者のスポーツクラブ組織をベースにしながら、総合型の地域スポーツクラブとして、障害のある子どもや大人はもちろんのこと健常者、健常児も参加する活動が行われるなどの活動が見られた。特に移民などの受け入れに際し、多様な国からの移住者が活動に参加している様子もみられ、スポーツクラブなどの活動が新たな社会形成に寄与する様子が見られた。

(3)農業地域(ニーダーザクセン州)のインクルーシブ教育への移行

ドイツでは、2009年5月に連邦政府が、国連の「障害者の権利に関する条約(2006)（以下障害者の権利条約）」を批准し、各州でインクルーシブな社会作りに向けてさまざまな取り組みが進められていた。

従来分離教育を基本としてきたニーダーザクセン州では、州政府が2012年からインクルーシブ教育の制度を採用したのに伴い、特別支援学校としての新たな取り組みが模索されている様子が見られた。

発達障害のある子どもを中心に専門的な教育支援(特殊教育学的支援)を展開してきた特別支援学校は、在籍する生徒数を減らす一方、地域の通常学校への巡回指導の対象児が増加してセンター的な機能を拡大してい

る。

インクルーシブ教育は、特別な教育的ニーズをもつ子どもの特性や学校の規模・特性によって左右されるため、学校長のリーダーシップが欠かせない。ヤーヌッシュ・コルチャック特別支援学校の校長は、20年以上にわたり同校を率いてきた。ドイツでは「近年は学校の裁量が拡大しており、それに伴って校長の任務や責任も増えている。独自のプログラムを学校が決定、実施、評価できるようになったことで、校長には、授業の質を保證すべく、授業開発、人材開発、組織開発」にはじまり「予算運用に対する責任なども新たに生じて」くるようになった。こうした学校や校長の権限は、中央集権型の日本のシステムから見ると大きく異なる特徴であろう。制度の移行が学校レベルで進められるにあたっては、「インクルージョンは理想」としつつも、特別支援学校の役割について自負してきた校長や教員などが、当初、変革に対する当惑や葛藤を抱える様子が見られた。しかしインクルージョンへの制度移行が進むなか、ヤーヌッシュ・コルチャック特別支援学校と地域の通常学校では、具体的な連携体制の構築や役割分担の明確化、評価方法の工夫などが行われ、次第に肯定的なとらえ方へと変化する様子が見られた。特にゼルジンゲン基礎学校では、インクルージョンへの移行に伴い導入が進められた1-2年生の合同クラス化やグループ学習に対し、教員が「学校全体の児童の”学力が底上げされた」と認識するなど、障害のある子どもを含めた授業展開において重要な役割を果たしていた。このように授業改善や多様な学習スタイルを取り入れることが効果的であると認識され、インクルーシブ教育が通常学校の負担としてではなく、成果としてとらえている様子も見られた。

重度の知的障害児者については、知的障害に伴う理解力の課題から、自己決定・自己選択などに困難を伴うことも多く、支援方法の工夫が求められる。リンデン特別支援学校の取り組みについては、これまでカリキュラムとともに余暇活動やスポーツ活動に関して個々の理解力などに応じて自己選択・自己決定ができるような支援の工夫を行っている様子を報告してきた。一方、州政府が2012年からインクルーシブな教育制度に移行したのにもない、特別支援学校として、新たな取り組みが模索されている様子が見られた。特別支援学校の大型設備や専門的指導技能などの学校機能を活用した通常学校との共同スポーツ授業なども始まっていた。さらに地域のスポーツクラブ(シュパス・ブス)の実施種目と連携させた活動への取り組みや、生涯に渡りスポーツを楽しむという視点からの「見るスポーツ」にもつながるスポーツ授業が展開される様子も見られた。

余暇活動やスポーツについては任意の活動であることから、就労支援や生活支援に比べてその重要性への認識が低くなりがちで

あり、環境の整備が遅れる要因ともなってきた。これに対し障害者の権利条約では、余暇やスポーツ参加を含めた社会参加のあり方についても示されている。インクルーシブ社会の実現にむけて障害者のスポーツクラブと地域のスポーツクラブの連携が進められるとともに、障害者の権利保障の観点から自己決定・自己選択に結びつく当事者への情報伝達方法の工夫なども進められていた。

これまで分離型の教育制度や社会システムのもとに進められてきた地方都市における障害児者の生活環境においても、条約内容の具現化に向けた様々な取り組みが始まっている様子が見られた。障害者の地域ネットワークからの孤立に伴う課題が指摘されるなか、教育機関との連携を含め余暇・スポーツ支援組織におけるニーダーザクセン州ローテンブルク市の地域的取り組みは、今後の日本の地域社会形成に対しても参考となるものと思われた

(4)小規模地域の学校とスポーツ

ニーダーザクセン州ゼルジンゲンにおいて、スポーツを核にして「地域に開かれた学校づくり」を展開しているゼルジンゲン基礎学校を対象に実施した調査では、地域の多様なニーズに対応するために「移民（難民）の子どもや障害のある児童を積極的に受け入れていること」「スポーツを積極的に活用していること」「新設したホールを活用して、地域と連携しながら、全日制学校のプログラムを充実させていること」などが確認された。また、これらの取り組みが、地域において高い評価を得るとともに「まちづくり」に寄与していることが示唆された。

ゼルジンゲン基礎学校の取り組みは始まったばかりであり、アウトカムとしての「まちづくり」に関する評価はこれからであるが、学校と地域スポーツクラブの連携など、今後のわが国における「コミュニティ・スクール」のあり方を考える上では参考にすべき点も多い。一方、ドイツにおいては、わが国とは異なり学校運営における校長の権限（予算と人事）が強いという特徴がある。今回の調査対象であるゼルジンゲン基礎学校の事例においても、校長のリーダーシップによる「予算の獲得」「人事計画」などが学校づくりに大きく寄与していた。

またニーダーザクセン州クライン・メッケルゼン村で展開されているスポーツクラブの活動と地域における公益性について、インタビュー調査および文献調査から記述し、今後のわが国の地域におけるスポーツクラブの役割を考える上での基礎的な資料を得ることを目的とした。クライン・メッケルゼン村のスポーツクラブは、青年団や他の文化的な活動団体と重層的なネットワークを形成しながら、社会統合（移民、難民）、市民の社会進出、女性の積極的関与、社会インフラ整備、納税などの公益性を発揮し、地域住民

の生活課題の改善に重要な役割を担っていた。しかしながら、運営資金の確保、人材の育成・確保など新たな課題にも直面していた。

<文献>

安部省吾、知的障害者雇用の現場から第2巻、文芸社、2005。

Zimmer, R., Handbuch der Psychomotorik, HERDER, 2006

Markowitz, R., Freizeit Inklusive, Kohlhammer, 2009. 窪島務、ドイツにおける障害児の統合教育の展開、文理閣、1998.

Heinemann K., 1999 : 川西正志ら訳、ヨーロッパ諸国のスポーツクラブ、2010。

安井友康、ドイツの精神 - 運動(Psychomotik)療法 - 指導の実際と指導者育成のシステム -、年報いわみざわ、1997。

安井友康、千賀愛、山本理人、障害児者の教育と余暇・スポーツドイツの實踐に学ぶインクルージョンと地域形成一、明石書店、2012

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計7件)

安井友康、千賀愛、山本理人、ベルリン市州における盲学校と通常学校の余暇・スポーツを通じた地域連携：ヨハン・アウグスト・ツォイネ盲学校とフレーミング基礎学校の実践事例から、北海道教育大学紀要教育科学編、査読無、68(2)、2018、99-114

ドルテッパー・グードルン、安井友康、山本理人、千賀愛、地域スポーツに変革をもたらす牽引力としてのパラリンピックと日本の取り組みに向けて、アダプテッド・スポーツ科学、査読無、15(1)、87-96、2017

山本理人、安井友康、千賀愛、ドイツにおけるスポーツクラブの活動と地域における公益性 - ニーダーザクセン州クライン・メッケルゼン村における TuS Klein Meckelsen の事例から - 北海道教育大学紀要（教育科学編）査読無、67(1)、425-439、2016

安井友康、千賀愛、山本理人、ドイツにおける学校と地域の余暇・スポーツの連携 - ニーダーザクセン州リンデン特別支援学校とローテンブルガー・ヴェルケの實踐から -、北海道教育大学紀要（教育科学編）査読無 66(2)、32-53、2016

安井友康、千賀愛、山本理人、池田千紗、インクルーシブな自由遊び場面における身体活動 - 事例を通じた活動時の運動特性と相互交渉 -、北海道教育大学紀要（教育科学編）査読無、66(1)、1-10、2015

安井友康、千賀愛、是永かな子、ドイツと北欧におけるインクルーシブ教育の最新動

向、北海道特別支援教育研究、査読無、9(1)、51-53、2015

安井友康・千賀愛、ドイツ・ニーダーザクセン州における特別支援学校のセンター的機能の拡大 - インクルージョンの実践事例から - 北海道教育大学紀要(教育科学編)、査読無、65(2)、55-71、2015

〔学会発表〕(計 15 件)

安井友康、千賀愛、山本理人ドイツにおけるインクルーシブな体育・スポーツの展開 - ベルリン市州・ニーダーザクセン州の事例から -、第 22 回日本アダプテッド体育・スポーツ学会(第 1 回障がい者スポーツ関連学会合同コンgres) 2017 年

山本理人、安井友康、千賀愛、地域の多様なニーズに対応した学校作りとスポーツ - ドイツ・ニーダーザクセン州ゼルジンゲン基礎学校の事例から -、第 22 回日本アダプテッド体育・スポーツ学会(第 1 回障がい者スポーツ関連学会合同コンgres) 2017

T. YASUI, A. SENGA, R. YAMAMOTO, C. Ikeda, Factors affecting inclusive physical activity in recreation, The 21th International Symposium on Adapted Physical Activity (国際学会), 2017

T.Yasui, R. Yamamoto, A. Senga, Factors Affecting Physical Education in Special Needs Education Schools: A Qualitative Case Study of Schools for the Visually Impaired in Germany and Japan, EUCAPA2016 in Olomouc (国際学会) 2016 年, Olomouc, Czech Republic

山本理人、安井友康、千賀愛、ドイツにおけるスポーツクラブの活動と地域における公益性-ニーダーザクセン州クライン・メッケルゼン村における TuSKlein Meckelsen の事例から-、JSAPE 合同コンgres 2016 2016 年、北海道教育大学

安井友康、山本理人、千賀愛、ドイツ・ベルリン市州における障害者の旅行・余暇支援 - フュスト・ドナースマークの取り組みから -、JASAPE 合同コンgres 2016、2016 年、北海道教育大学岩見沢校

ニコル・ヴォールブルグ、千賀愛、安井友康 窪島務、グードルン・ドルテッパー、ゲーリンド・クルージュウスドイツ・ベルリン市フレーミング基礎学校のインクルーシブ教育とスポーツ授業 Inclusive Education and Sports Class at "Flaeming-Grundschule" (primary school)in Berlin, Germany JASAPE 合同コンgres 2016、2016 年、北

海道教育大学岩見沢校

千賀愛、池田千紗、安井友康、インクルーシブな子育て広場 "キンダーぷらつ (Kinder Platz)" : InclusivePhysical Activity JASAPE 合同コンgres 2016、2016 年、北海道教育大学岩見沢校

T.Yasui, R. Yamamoto, A. Senga, Factors Affecting Physical Education in Special Needs Education Schools: A Qualitative Case Study in Niedersachsen Germany and Hokkaido Japan ASAPE 2016 (国際学会) 2016 年, Daegu Korea

千賀愛、安井友康、ベルリン市州フレーミング基礎学校における内的分化とステーション型授業の実践 : 担任教師へのインタビューと参与観察から、SNE 学会 2016、2016 年、金沢大学

安井友康、千賀愛、ベルリン市州における特別支援学校と通常学校の地域連携 視覚障害児の支援実践事例から、SNE 学会 2016、2016 年、金沢大学

安井友康、山本理人、千賀愛、ドイツ・ベルリン市州におけるスポーツ授業と地域スポーツ - 視覚障害児に対する通常学校、特別支援学校との地域の連携事例から -、第 19 回日本アダプテッド体育・スポーツ学会、2015 年、神奈川工科大学

安井友康、山本理人、千賀愛、ドイツと北欧におけるインクルーシブ教育の最新動向 - ドイツのインクルーシブ教育における特別支援学校の役割の変化、北海道特別支援教育学会 第 10 回記念 札幌大会、2015 年、北海道教育大学札幌校

Yasui T., C.Ikeda A. SENGA, R. YAMAMOTO, T. OKUDA, M. Kimura, Developmental Changes of Motion of Children with and without Disability in Trampoline Activity, The 20th International Symposium on Adapted Physical Activity (国際学会), 2015 年, イスラエル・ウイングートインスティテュート

安井友康・山本理人・千賀愛、ドイツにおけるインクルージョンとスポーツ授業の展開、第 35 回医療体育研究会 / 第 18 回日本アダプテッド体育・スポーツ学会、第 16 回合同大会、2014 年、神戸女学院大学

〔図書〕(計 1 件)

Tomoyasu YASUI, Passionately Inclusive; Towards Participation and Friendship in Sport, Waxman Verlag GmbH,

International Council of Sport Science and
Physical Education (ICSSPE/CIEPSS)
73-75, 2017 (分担執筆)

6 . 研究組織

(1)研究代表者

安井 友康 (YASUI TOMOYASU)

北海道教育大学・教育学部・教授

研究者番号：00260399

(2)研究分担者

山本 理人 (YAMAMOTO RIHITO)

北海道教育大学・教育学部・教授

研究者番号：80312429

千賀 愛 (SENGA AI)

北海道教育大学・教育学部・准教授

研究者番号：10396335